

一七世紀の

平戸・出島蘭館の医薬関係者について

ヴォルフガング・ミヒェル

江戸時代に来日した蘭館医の一覧表はよく知られているものがいくつかあるが、そこに掲載されている人物について具体的な出典が示されていないため、使用者はこの内容を信じるしかない。私も長年そうしてきた。しかし一七世紀の東イ

ンド会社の様々な資料に眼を通していくうちに、多くの場合偶然にはあるが、上記の表の不正確な箇所や未知の人物 (Stamper, Pauts, Kempf, Gessel, Jacobsz., Hancko, Haeck, Braun, Strijckersberg) が浮かび上がってきたり、周知の蘭館医についても新たな情報が得られることがあった。また、これまで見落とされてきた下位外科医 (onderchirurgijn) / 薬剤師 (apotheker) の存在も注目に値する。外科医などの身分が商人より低いいため、出島蘭館日誌に彼らの名前が記されていない場合が多いので、商館長の手紙、後任への申し送り状、契約更新の記録などで丹念に調べなければならぬ。

商館長

商館長の在任期間

医師、薬剤師など

Jacques Speck	20. 9. 1609-28. 8. 1612	
Hendrick Brouwer	28. 8. 1612-6. 8. 1614	
Jacques Speck	6. 8. 1614-29. 10. 1621	
Leonardt Camps	29. 10. 1621-21. 11. 1623	
Cornelisz. van Neijenroode	21. 11. 1623-31. 1. 1633	Carel Lourensz[oon] (1630年か㊦)*
Pieter van Sante[n]	31. 1. 1633-6. 9. 1633	Pieter Stamper (1631年)*
Nicolaes Couckebacker	6. 9. 1633-3. 2. 1639	Carel Lourensz.
François Caron	3. 2. 1639-13. 2. 1641	Carel Lourensz. (1635年*㊦)
Maximiliaen Le Maire	14. 2. 1641-30. 10. 1641	Maerten Wesselingh (1635, 1636, 1637年)*
		Hans Pauts*
		Jirgen/Jurjaen Henselingh*
		Jurjaen Henselingh

Jan van Elseracq	1. 11. 1641-29. 10. 1642	Juriaen Henselingh
Pieter Anthonijsz. Overtwater	29. 10. 1642-1. 8. 1643	Juriaen Henselingh
		Cornelisz. Stevensz[oon]*
Jan van Elseracq	1. 8. 1643-24. 11. 1644	Juriaen Henselingh
		Cornelisz. Stevensz.
Pieter Anthonijsz. Overtwater	24. 11. 1644-30. 11. 1645	Cornelisz. Stevensz.
Reijnier van 'tZum	30. 11. 1645-27. 10. 1646	Karl/Carel Kempf*
Willem Versteegen(Versteijen)	28. 10. 1646-10. 10. 1647	Mathijs Crousen ③
		Jacob van Gessel*
Frederick Coijet	3. 11. 1647-9. 12. 1648	(?)④
Dircq Snoecq	9. 12. 1648-5. 11. 1649	(?)⑤
Antonio van Brouckhorst	5. 11. 1649-25. 10. 1650	Caspar Schamberger ⑥
Pieter Sterthemius	25. 10. 1650-3. 11. 1651	Caspar Schamberger
Adriaen van der Burgh	1. 11. 1651-3. 11. 1652	Johannes Wunsch*
Frederick Coijet	4. 11. 1652-10. 11. 1653	Johannes/Jan Stipel*
Gabriel Happart	4. 11. 1653-31. 10. 1654	Johannes/Jan Stipel
Leonard Winninx	31. 10. 1654-23. 10. 1655	Johannes Wunsch
		Pieter Jacobsz[oon]*
Joan Boucheljon	23. 10. 1655-1. 11. 1656	Hans Jürgen/ Juriaen Hancko*
		Pieter Jacobsz.
Zacharias Wagener/Wagenaer	1. 11. 1656-27. 10. 1657	Hans Juriaen Hancko
		Pieter Jacobsz.
Joan Boucheljon	27. 10. 1657-23. 10. 1658	Steven/Stephan[us] de la Tombe (?)*
		Pieter Jacobsz.

Zacharias Wagener	22. 10. 1658-4. 11. 1659	Stephan[us] de la Tombe Pieter Jacobsz.
Joan Boucheljon	4. 11. 1659-26. 10. 1660	Stephan[us] de la Tombe Pieter Jacobsz.
Hendrick Indijck	26. 10. 1660-21. 11. 1661	Herman[us] Katz
Dirck van Lier	11. 11. 1661-6. 11. 1662	Herman Katz ⁸
Hendrick Indijck	6. 11. 1662-20. 10. 1663	Palm (?) Daniel Busch ⁹
Willem Volger	20. 10. 1663-7. 11. 1664	Abraham van Kerpen ¹⁰ Daniel Busch ¹¹
Jacob Gruijs	7. 11. 1664-27. 10. 1665	Herman[us] Visscher (Fischer?) ¹²
Willem Volger	28. 10. 1665-27. 10. 1666	Daniel Busch ¹³ Johannes Wunsch (?) Cornelisz. de Laber (?)
Daniel Six/Sicx	18. 10. 1666-6. 11. 1667	A[e]rnou[d]t Dircksz[oon]*
Constantin Ranst	6. 11. 1667-25. 10. 1668	Arnout Dircksz.
Daniel Six	25. 10. 1668-14. 10. 1669	Arnout Dircksz. (9. 1. 1669 †)
François de Haas	14. 10. 1669-2. 11. 1670	Moijses Maroon (1. 1. 1671 †)* Pieter van der Veste[n] ¹⁴
Martinus Caesar	2. 11. 1670-12. 11. 1671	Godefried Haeck/Haak (雜記) ¹⁵ * Moijses Maroon ¹⁶
Johannes Camphuijs	22. 10. 1671-12. 11. 1672	Pieter van der Veste[n] Frans Braun (雜記) ¹⁶ Willem Hoffman*

Marinus Caesar 13. 11. 1672-29. 10. 1673
 Johannes Camphuijs 29. 10. 1673-19. 10. 1674
 Martinus Caesar 20. 10. 1674-7. 11. 1675
 Johannes Camphuijs 7. 11. 1675-27. 10. 1676
 Dirck de Haas 27. 10. 1676-16. 10. 1677
 Albert Brevincq 16. 10. 1677-4. 11. 1678
 Dirck de Haas 4. 11. 1678-24. 10. 1679
 Albert Brevincq 24. 10. 1679-11. 11. 1680
 Isaac van Schimme 11. 11. 1680-31. 10. 1681
 Hendrick Canzius 31. 10. 1681-20. 10. 1682
 Andreas/Andries Clever 20. 10. 1682-8. 11. 1683
 Constanin Ranst de Jonge 8. 11. 1683-28. 10. 1684
 Hendrick van Buijtenhem 25. 10. 1684-7. 10. 1685
 Andreas Clever 17. 10. 1685-5. 11. 1686
 Constanin Ranst de Jonge 5. 11. 1686-25. 10. 1687
 Hendrick van Buijtenhem 25. 10. 1687-13. 10. 1688

Frans Braun (樂定鍾) ⑫
 Pieter van der Vesten (龜半)
 Willem Hoffman ⑩
 Hans Schoonsoon (?) ⑨
 Frans Braun (樂定鍾)*
 Willem Hoffman ⑩
 Adriaen van Strijkersberg*
 Willem Hoffman
 Willem ten Rhijne ⑪
 Willem Hoffman ⑫
 Willem ten Rhijne ⑬
 Reinier Wier/Weijn (?)
 Reinier Wier/Weijn (?)
 Jacob Dijkhoff ⑭
 Jan Bartelsz. (Jan Bartelsa Benedictus)*
 Jan Bartelsz[oon]
 Jan Bartelsz.
 Jan Bartelsz.
 Hendrik Obé
 Hendrik Obé
 Hendrik Obé
 Albert Croon ⑮
 Jan Bartelsz.
 Jan Bartelsz.
 Jan Bartelsz.

Cornelisz. van Outhoorn 13. 10. 1688-1. 11. 1689
 Balthasar Smeers 1. 11. 1689-21. 10. 1690
 Hendrick van Buijtenhem 21. 10. 1690-09. 11. 1691
 Cornelis van Outhoorn 9. 11. 1691-29. 10. 1692

Jan Bartelisz.
 Jan Stockman⁽²⁶⁾
 Engelbert Kaempfer⁽²⁷⁾
 Engelbert Kaempfer⁽²⁸⁾

*印が付いている外科医について以下に詳しく紹介することにする。名前の綴りは、当時の文献により多少異なることがよくあるので、その相違の幅を示しながら、名前の統一を行った。

Carel Lourensz[oon] これまでは一六三〇年と一六三一年の普通の書翰から知られていたカールルの名字は一六三四年一月二四日の *generale missive* に現われる⁽²⁹⁾。一六三〇年、人質として他のオランダ人たちと共に大村に囚われていた前台湾総督ピーテル・ノイツ (Pieter Nuits) の息子ローレンス・ノイツ (Lourensz Nuits) が、激しい下痢を伴う病氣にかかり、同じく人質であった下級商人ピーテル・ムイゼル (Pieter Muijser) の知らせに対して、平戸の商館長ナイエンローデがすぐに返事を送った。その返書から、大村にカールという外科医がいたことがわかる。ナイエンローデは、カールルには薬品についてのラテン語の説明書は理解できない事を挙げ、また、外科医の薬箱よりも薬屋の方が品揃えがよいと当時の外科医による治療の問題点を指摘した上で、役に立ちそうなワイン、アーモンド、干しぶどうや肉豆蔻 (*mannenkens nooten*)⁽³⁰⁾ を送った。肉豆蔻は、当時ヨーロッパでかなり

の反響を呼んでいたという。また、前年カレル宛に平戸に届いていた薬缶も送ると記してあるが、この書翰が書かれたとき、ローレンス・ノイツはすでに死亡していた⁽³²⁾。

カールル・ローレンスは長く日本に滞在していたようである。一六三〇年代半ば頃、東インド会社との契約が切れた時、彼は「自由民」(*vrijburger*)として平戸に留まっていたが、一六三五年、バタヴィアから届いた命令によりローレンスは、同じく「自由民」として平戸に住むことにしていた元航海士ヘンドリック・アーレンツ (Hendrick Arentsz.) と共にグロル号 (*Grold*) で日本を去ることになった⁽³¹⁾。恐らく、日本側も東インド会社側も、管理しにくい自由な身分のオランダ人が日本で活動することが気に入らなかつたのであろう。命令によると、バタヴィア、アンボイナやバンドゥに住み着くか、それともヨーロッパへ帰るのか、を迫られたが、ローレンス自信がどういう決定をしたかは不明である。長年に亙る日本滞在を終えた時点で、彼の財産は五〇〇タイルになっていた⁽³³⁾。

Pieter Stamper 平戸侯(松浦肥前守隆信)が、一六三一年三月に発病した江戸の町奉行嶋田弾正忠次兵衛利正のために「経験豊かな外科医」とあらゆる薬品を要請したことは、永

積洋子氏の研究によりすでに周知のことである。³⁶ はじめナイエンローデはカーレル・ローレンツを派遣するつもりであったが、どういう訳かそれには江戸からの許可が必要だった。しかし時が迫っていたため、フレデー号 (Vredé) のピーテル・スタンペルを送ることにした。長崎奉行は彼をいくらか知っており、おそらく腕の確かな外科医と見なされていたであろう。町奉行嶋田の病気については、依頼状には、「体中にふけや悪性の腫物」ができて日本人医師には手のほどこしようがなかったとしか説明されていない³⁷。そこで停泊中のすべてのオランダ船に乗っていた外科医たちが協議して、大急ぎで必要と思われる薬品を用意した。

幸い町奉行嶋田の病気についての依頼状の説明はかなり誇張されたものだった。しかしながらこの、善意で行われた援助は後味の悪いものを残してしまった。嚴重に注意されていたにもかかわらず、酒癖の悪いスタンペルは途中で飲んだり、かなり攻撃的になったりしていた。ナイエンローデは、日本食が合わなかったときのために四マイルを与えていたが、これもお酒に使ってしまい、京都では盗みまではたらいた。平戸へもどると、祖国にはかり知れない恥をかかせたとして、ナイエンローデが厳しい罰を科したもうなずける³⁹。当時の三〇年戦争の物語に登場する「敷醫師」を思わせるスタンペルの振る舞いは、彼の外科医として能力にも陰を落とすことになる。

Maerten Wesselingh マルテン・ウェセリングはコペン

ハーゲン生まれとなっている⁴⁰。バタヴィア日記に写された、一六三七年一月二日付の総督ヴァン・ディーメン (Van Diemen)宛ての手紙では、長崎代官末次平蔵は外科医ウエセリングを大変賞賛している。ウエセリングは一六三五年と一六三六年に末次と長崎奉行をひとり治療し、侍医たちに「多大な愛情と熱意をこめて多くのことを」教えたという。再び衰弱することを恐れていた末次は、ウエセリングを再度日本へ派遣するよう依頼した⁴¹。一六三七年一月十九日付の末次からディーメンへの二通目の手紙から、この依頼が次の日本向けの船によって果たされたことがわかる。しかし、一月にはすでに彼は(恐らくは回復したため)来る必要がなくなっていた。ウエセリングはその後船で台湾へ向かったが、Zeelantiaの日記には二年間繰り返し外科医としてその名をとどめている。その後も台湾で下級商人として働き、一六四一年タマカル (Tamakaloe) で殺害された⁴²。

Hans Pauts ハンス・パウツはドイツ・マグデブルク近郊の小さな町オシエルスレーベン (Oschersleben) 出身で、月給二二ギルグで下級外科医としてアンボイナ号 (Amboina) に入り一六三五年七月にバタヴィアに着いた。一六三九〜四〇年、ドイツ・ウルム (Ulm) 出身の砲術下士官ハンス・ヴォルフガング・ブラウン (Hans Wolfgang Braun) の指導のもとで將軍のために臼砲、榴弾、砲架やその他の付属品が製造されていた時、平戸商館では火傷やその他の外傷が頻発していたようである。また、ブラウンが江戸で自ら体験したように、試砲

は、非常な危険を伴った。誤砲の際には白砲がその中味ともども粉々になってしまうのである。一六四〇年一月一日付の商館長カロンの記述によれば、パウツは特に、將軍の命によりしばらく仕事の監督のために派遣されてきた役人三人の面倒をよく見ていた。おそらく彼は、在任期間が過ぎていたため、帰国することを考えていたであろうが、上述の役人たちを怒らせまいとして、カロンはパウツの月給を一六三九年七月二六日に遡り四〇ギルダに上げ、上級外科医に任命してさらに三年間東インド会社で働くよう、契約を結んでいる。鑄造の仕事と武器の設置にはその後何ヶ月間もかかったので、パウツは少なくとも一六三九年夏から一六四〇年秋までは日本にいたことになる。⁽⁴⁷⁾

Jürgen (Jurien) Henseligh ユリアーン・ヘンゼリングもマグデブルク出身のドイツ人で、月給二五ギルダでアマリア号(Amilia)の外科医として一六三八年一〇月にバタヴィアに着いている。一六四一年一〇月に三年の契約が切れ、一六四二年九月三〇日に出島商館長エルセラックにより契約を更新した。⁽⁴⁸⁾この間の事情については一六四二年一〇月一七日、日誌に新たに記載されている。エルセラックによれば、ヘンゼリングは大目付筑後殿と長崎奉行の求めにより日本に留ま⁽⁴⁹⁾っている。彼の勤務振りと、大目付、奉行の求めにより上級外科医に昇進した。⁽⁵⁰⁾商館日誌にもユリアーン・ヘンゼリングの名前が記載されている。⁽⁵¹⁾これらの記述を照らし合わせると彼は少なくとも一六四一年秋から一六四四年秋まで日本にい

たことになる。一六四三・四四年の江戸参府に伴う負担を軽くするため(tot soulagement)、彼は特別手当として一七タイルを得ている。⁽⁵²⁾

Cornelisz. Stevensz[oon] オランダのミデルブルフ(Middelburgh)出身のコルネリス・ステフェンスゾーンは、月給一八ギルダでオストカペレ号(Oostkapelle)の下級外科医(onder barbier)として、一六三六年七月にバタヴィアに来る。彼は、後にバタヴィア総督の指示により外科医(Barbier)に昇進し、月給は二倍になっている。⁽⁵³⁾遅くとも一六四二年秋には来日している。一六四二年末の江戸参府の決算を見ると、一七タイルの特別手当を得たのは上記のヘンゼリングではなく就任したばかりのステフェンスゾーンである。⁽⁵⁴⁾一六四三年四月九日に出島で数人のオランダ人と日本人の立会のもとに作られた甲板長ヒケ・エツセルス(Hicke Eggers)の遺言状に彼は、相続人の一人としてその名を挙げられている。⁽⁵⁵⁾一六四三・四四年、彼の上司上級外科医ヘンゼリングは江戸参府に同行しているが、ステフェンスゾーンは出島に残っていた。⁽⁵⁶⁾一六四四年一〇月六日付の契約更新により、彼は同年一二月一日付をもって上級外科医に昇進し、月給は四四ギルダになった。その理由について、商館長エルセラックは、彼の外科医の仕事振りと熱心に書記と倉庫の見張りを勤めた業績を強調している。⁽⁵⁷⁾新契約の任期は三年であった。その二日後の一〇月八日にはステフェンスゾーンの名が初めて商館長日誌にも現われる。⁽⁵⁸⁾同年末の江戸参府で彼は上位外科医として一七

タイルの特別手当を支給された。一六四五年秋に離日し、一六四六年にはポーランド王号(Koning van Polen)で勤務した。⁽⁶⁴⁾

Karl Kempf (Carel Kempf) カール・ケンプフは一六〇七年一月二三日にルター派の市参事会幹部ハンス・ケンプフ(Hans Kempf)と妻マルガレット(Margaret)の息子としてドイツ・プファルツの地方都市ランダウ(Landau)に生まれた。⁽⁶²⁾なぜ上流家庭の子であった彼が身分の低い外科医職に就いて東アジアに来たのか不明である。彼は一六四五年秋に日本へ赴いたと考えられる。一六四六年一月にケンプフは江戸参府に同行し、一八タイルの特別手当を得た。この参府の決算は、彼の名前、職業及び出生地を示す唯一の文献である。⁽⁶³⁾

Jacob van Gessel オランダのユトレヒトで生まれたヤーコップ・ゲッセルもこれまで知られなかった外科医の一人である。彼は、月給一〇ギルダでオリファント号(Olifant)の兵士として一六四六年末にバタヴィアに来た。いつ頃から出島で臨時に(provisionelijck)下級外科医を勤めていたかは不明であるが、豊富な知識と経験を持っていたゲッセルは、一六四八年一月九日には前年の一月二日に遡って下級外科医に正式に昇進し、月給は一八ギルダに上がっている。昇進したとき彼は東南アジアのトンキンにおり、長崎とトンキンの間を通っていたと考えられる。⁽⁶⁴⁾

Johannes Wunsch ドイツ・エアフルト(Erfurt)出身のヨハネス・ヴンシュは、月給二六ギルダでクロー号(Kloe)の下級外科医として一六四七年五月末にバタヴィアに到着した。

そこで初めは要塞の病院で働き、後に様々な船の上級外科医を勤めた。ヴンシュは一六五一年の夏カスパー・シヤムベルグの後任として来日し、契約の任期満了のため、一〇月六日に上級外科医として三〇ギルダの月給で新たに三年の契約を結んだ。⁽⁶⁵⁾その年の商館長ステルテミウスの日誌には「外科医」としてしか記されていないが、一緒に出島で勤務していたスウェーデン人オロフ・ウィルマン(Olof Willmann)の旅行日記にはヴンシュの名前が見られる。彼は一六五二年の秋に日本から離れ、一六五四年には再び来日し、商館長ヴィンクスと二度目の江戸参府に同行している。⁽⁶⁷⁾

Johannes (Jan) Stipel ヨハネス・ステイペル(またはヤン・スティペル)はオランダのユトレヒトで生まれた。彼は月給三四ギルダでヴィテン・オリファント号(Witten Olifant)の下級外科医として一六五〇年一月にバタヴィアに着いた。最初は上級外科医として東南アジアの小島ソロールの「ヘンリクス要塞」(fortresse Haricus)で働き、一六五二年には日本へ転動してきている。初年の日記には職業名 heelmeeesterでしか現われていない。次の任期中には、一箇所 chirur-gijn Jan Stipel⁽⁶⁸⁾ あとはすべて n[leeste]r Jan Stipelとなっている。彼の雇用契約は一六五三年で終わっている。一六五四年一〇月一日には、前回の江戸参府での業績や満足できる立派な勤務振りから新たに上級外科医として認められている。昇給や任期については具体的な取り決めはなされず、その後のことはすべてステイペルに任されていた。⁽⁷⁰⁾翌春にはヴ

ンシュが上級外科医として江戸へ赴いているので、ステイペルは一六五四年の晩秋には日本を離れていたものと考えられる。

Pieter Jacobsz[oon] オランダのミデルブルフ出身のピーテル・ヤコプスゾーンは、一六五一年五月にタイオワン号(Taiouan)で下級外科医として月給一二ギルダでバタヴィアに來た。彼は遅くとも一六五四年の夏頃には來日した筈である。任期が満了し、出島で下級外科医を必要としていたため、同年一〇月一日、商館長ハッパルトによつて新たな契約が三年の期限で結ばれ、月給は二二ギルダになった⁽¹¹⁾。

当時の上級外科医ウンシュが一六五五年春に江戸へ行つてゐる間、ヤコプスは出島に残つたオランダ人の世話をしていた⁽¹²⁾。彼は商業への転職を熱望し、倉庫関係の仕事で業績を上げた。一六五七年一〇月に任期三年の契約が切れたため、ヤコプスは商館長ワージェネルの出航直前の二七日、同じ月給でさらに三年の契約を結んでいる。もう一年出島の下級外科医をつとめる条件で、彼は翌一六五八年五月一〇日から助手の職に就くことを約束されたが、少なくとも一六六〇年までは相変わらず江戸参府中の外科医の代理を兼担せざるを得なかつた⁽¹⁴⁾。

Hans Jürgen (Jurjaen) Hancko ハンス・ユリアーン・ハンコは東部ドイツのブレスラウ(Breslau、現在はポーランドのプロツラフ)で生まれた。彼は月給三二ギルダでクロー号(Kloe)の上級外科医として一六四七年六月にバタヴィアに

來た。任期五年の契約が切れたから、彼は毎年ヨーロッパに帰るつもりでいたので、期限付きの契約を結んだり、「昇進」を願うこともなかつた。出島で一年間の勤務を終えた一六五六年の秋もそうだった。江戸参府の際、数名の大物の診察や治療で彼は大きな業績を挙げたが、商館長ブヘーリヨンが勧めた滞在延長に対しては非常に消極的であつた。結局特定の任期を定めずに月給を三二ギルダから四二ギルダに上げることで納得してもらつた⁽¹⁵⁾。新任商館長ワージェネルへの引き継ぎ報告の中ではさらに、上級外科医ハンス・ハンコはあらゆる授業を行つておること、また次の春にも江戸へ行かせるよう助言したことなどが記載されている。モンターヌスもこの報告を引用している⁽¹⁶⁾。ハンコは一六五六年から翌年にかけて向井元升に西洋外科術について教え、その軟膏薬はアンズ・ヨレアムという名で様々な写本に現れる。なお、洋学史事典は一六五六・五七年の欄にアブラハム・ヴェインス(Abraham Weijns)を載せているが、彼は助手で、せいぜい下級外科医⁽¹⁸⁾だった。

Steven/Stephan[us] de la Tombe オランダのシーダム(Schiedam)出身のステファヌス・デ・ラ・トンプは、月給三〇ギルダでブルメンダール号(Bloemendaal)の外科医として一六五五年六月にバタヴィアに着いた。彼がいつ出島の外科医に就任したかははっきりしないが、一六五八年六月一〇日付のバタヴィア総督マートソイケル(Matsoijcker)が署名した新契約書には前年度の出島商館長ブヘーリヨンによる

デ・ラ・トンブへの高い評価が付けられているので、彼はすでに一六五七年の秋から日本で働いていたはずである。残念ながら、プヘーリヨンの日誌にはトンブの名前が見られない。上記の任期三年の契約更新によりデ・ラ・トンブは、上級外科医として四五ギルダの月給を得た。一六六〇年、m[este]r Steven が江戸へ行っている間、ピーテル・ヤコプスは出島の chirurgijns winckel を担当するといふ記述から、デ・ラ・トンブは引き続き日本で活動していたと分かる。尚、洋学史事典に見られるコルネリス・ムロックは下位商人と倉庫管理者 (dispancier) を勤めていたことになっている。

Arnout Dirksz[oon] アムステルダム生まれのアルノウト・ディルクスゾーンは、一六六三年にバタヴィアに到着し、一六六六年一〇月から日本で勤務することになった。商館長日誌の数ヶ所が挙げられている彼の名前 (Arnout Dirksz. Arnout Dirks, Aernoudt Dirksen) を見ると、恐らく正式な名前は Arnout Dirksz[oon] だったと思われる。一六六八年一月二一日彼は医師瀬尾昌琢のためにあの有名な証明書を発行する。ディルクスゾーンは出島で一六六九年一月九日遺言状を書かずに、体をむしばむ病で (een uijteteende ziekte) 死亡した。翌日、奉行所から来た二人の検士が死体を「湾の向こうのオランダ墓地で埋葬した」。

Moises Maroon モイセス・マローンは一六六九年から上級外科医として出島におり、一六七一年一月一日夜から二日にかけて出島で死亡した。それまでの二、三ヶ月は病気で、

体が麻痺していた。彼も「出島の向こう岸のいつもの墓地に運ばれた」。

Godfried Haack (Haak) 名前からはドイツ出身と思われるゴットフリード・ハークは若い薬剤師であった。薬草の専門家と蒸留者が求められていたため、彼は一六七〇年日本に派遣されたが、日本側はより経験の豊富な人を期待していたようである。

Frans Braun 薬剤師のフランシス・ブラウンは一六七一年にハークの後任として「チュールペンブルツヒ」号 (Tulpenburgh) で長崎に到着した。彼は一六七三年まで出島にいた。

Adriaen Strijckersberg アドリアーン・ストライケルスベルツヒはロッテルダムで生まれた。一六七三・七四年に日本で任に就き、七四年末にハーゼンベルツヒ号 (Haseenberg) でバタヴィアへ向かった。ここでは、アルベルツス・ボップ (Albertus Bopp) が八月一三日に死亡してから皆の上級外科医の職が空席になっており、ストライケルスベルツヒはその後任に指名された。一六八二年四月八日に彼は皆の医局長になっている。一六八四年六月六日には上級商人になり、この地位に彼は少なくとも一六九六年まで就いていた。一七〇二年まで公衆衛生業務の長をしていた。その一五年間に彼が外科医から上級外科医に昇進させたのは三人だけだった。

Willelm Hofman ヴィレム・ホフマンは、一六七一年に日本に来て、続けて五年間も上級外科医として勤務していた。一六七二年一二月一七日ホフマンは「筑後殿」の医師に証明

書を発行している。この「Doctor」は一六七二年一月二六日から外科学と油類の蒸留法を学び、「殿様と他の日本人に対してその学識が強調できるように」証明書の発行を依頼した。残念ながら、この証明書は行方がわからない。

一六七六年の商館長日誌には、「同時に上級外科医も勤める下位商人」という記述があるので、ホフマンが商人への転向に成功したことが分かる。この年、彼は病気のため江戸へは行っていない。尚、一六七四年一月から一六七六年一月まで出島に滞在していたヴェイレム・テン・ライネ博士は通常の蘭館医ではなく、別枠で日本へ派遣された人である。

Hendrick Obe ヘンドリック・オベーは「新ネデルランド」(New York?)出身で一六八三年夏に上級外科医として来日し、日本側の要請により一六八四年秋以降、さらに一年留まることになる。一六八五年にはしかし下級商務官になった。クラフトによれば彼は一六八六年には日本を離れなければならなかった。一六八九年には東南アジアのセマラング島 (Semarang) の総督になった。一六九五年にはヤバム島の管理官になり、一六九五年九月二〇日に商務官に昇進した。一六九六年一月二五日にバタヴィアへ戻ったが、そこで問題が起きたようである。同年三月一日に改めて行政官としてヤバムへ派遣されたときには、報酬や地位の「待遇改善」を条件にした。ここで彼のキャリアは終わり、昇進も昇給もなくヨーロッパへ帰った。オベーの名前は商館長日誌の所々で見られる。

Jan Bartelsz[oon] 当時のラテン語指向により、ヤン・バルテルスの名前は Jan Bartelsa Benedictus と綴られることがある。添え名の Benedictus (つまり恵まれているもの) は幸福な生活を暗示している。バルテルスはまず一六八〇年に三年の予定で来日し、二度目の滞在期間は一六八六年から一六八九年だった。なぜ彼はあれほど管理されていた出島商館での生活に、一七世紀のどの外科医よりも長く、七年間にわたって耐えられたのだろうか。

一三三の問題点

「ステイビン」江戸時代の写本にはよく「ステイビン」の名で現われる。これはヤン・ステイペルだという説もあるが、日本語での表記は元来の発音とはかなりかけはなれている。おそらくステファン・デ・ラ・トンプ (Stephan de la Tombe /つまり meester Steven) のことではないだろうか。

「コルネリス」これはコルネリス・ムロック (Cornelisz. Mulock) とされてきたが、オランダの資料ではムロックについては商人としての職歴しか見当たらない。たとえばコルネリス・ステフェンズンかコルネリス・デ・ラーベルだったかも知れない。

「伊保宇」、「多阿須」享保三年(一七一六年)の「阿蘭陀外科和朝世系之図」では加須波留 (Caspas Schamberger) / 須庭賓 (Steven) / 阿無須與利安 (Hans Juriaen Hancko) / 阿留曼須加津 (Hermannus Katz) / 阿留能登 (Arnout Dircksz.) と

並んで「伊保字」と「多阿須」の名前も挙がっている。他の名前が特定できる以上、最後の二者についてもこれまで知られていない外科医だった可能性がある。

「ハルム」 桂川甫築の繕生室医話(巻一)ではその書物についての説明の中で、オランダ人の名前が挙がっている……。

「寛文元年辛丑九月四日從鎮信公長崎御奉行黒川與兵衛殿江御頼下拙阿蘭陀外科稽古ス其時ノ師匠ハハルマンスカツツカピタンノ名ハデレキハンリイルト云同二年寅正月廿六日右ノメストル江府江参向ニ付下拙モ参候此ハルマンズハ阿蘭陀ニテモ名人ノ由カピタン云ナリ此メストルニ二年附添其後代リニダンネルト云メストル来朝スカピタンラインデレキト云又其代リニハルムト云メストル来朝メスタンネルニ三年パルムニ一年都合六年ノ間通詞各立合吟味ヲ遂ゲ右兩師ノ印可并通詞ノ連判ノ一卷ニ稽古ノ目錄箇條委細有之也夫ニテ其品々ヲ見合可有事凡阿蘭陀江の傳ト云事ハ曾テ難成事ナレドモ太守ノ御憑寄相叶所也又此書ハ師匠江此方ヨリ問懸通詞ニ和ケサセ書集虫仕立素下愚無学短才ナレバ文章更不宜然トモ全ク無違説也其慥成所ヲ愚息ニ知ラセン為ニ書キ記ス也更ニ他人之見ニアラザレバナリ

一右ノ師禮ニ寛文二寅九月廿三日歸帆ニハルマンズヘ白銀三十枚御使野口小右衛門

一同九月ニダンネル江白銀十枚帰帆ニ又十枚樽一荷看一箱

一同卯九月ニハルム江白銀十枚都合白銀六十枚太守ヨリ遣ル者也

皆二天和三癸亥五月兩中法橋甫安春育五十一歳ニテ改書之子甫安景富愚息江附屬スルニヨリ四十七歳ニテ書籍上中下三冊ニ改書之

商館長と外科医の名は出島商館の記録と合っている。寛文二年九月二三日(一六六二年一月四日)の日付も信頼できる。一月五日にはリール(Reel)と任期を終えた部下が旅立つており、外科医「ハルム」(Palm?)の存在を疑う理由はない。「ハンス」 宗田一氏所蔵のカスパル流猪股伝兵衛系の相伝証(元禄七年、一六九四年)は「紅毛医渡扶桑之衆」としてカスパル、ステヒン、アンソヨレアン、ハルマンズ、ヤン、コルネリス、カツ、ハンスの名を挙げてゐる。このリストで初めて現われるのはハンス(Hans)で、おそらくドイツ語圏の出身者と思われる。

文献

- (1) 大鳥蘭三郎「蘭館日誌の医史学的研究」。日本医史学雑誌 第一〇巻第一号、昭和三十七年(一九六二年) 111-164頁。大鳥蘭三郎「蘭館日誌の医史学的研究」。日本医史学雑誌、第一〇巻第二、三号、昭和三十九年(一九六四年) 1-12頁。服部敏郎『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館、東京、昭和六三年(一九八八年) 三三〇-三三八頁。日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、東京、昭和五十九年(一九八四年) 付表三。
- (2) オランダの国立中央文書館 (Algemeen Rijksarchief, s' Gravenhage = ARA) の資料としての略号は ARA 1.04.21, Nederlandse Factorij Japan = NFJ + 番号。出島商館日誌の資料にはちゅうじ DD を付記する = NFJ + 番号, DD + 日付, または ARA 1.04.02, オランダ東インド会社は VOC + 番号。その他の資料については toegan-gnummer を付記する。
- (3) 「opperchirurgijn Mathijs Crousen」は日記の引用箇所から見られる。NFJ, DD 3.12.1646, 21.1.1647, 11.4.1647 等々。
- (4) この外科医もクロウセンかも知れない。彼は江戸参府同行者として一八タイトルの特別手当を得た (NFJ 1166, Reekeninge 1647/1648: een Barbier)。また日記の他の箇所ではただ「chirurgijn」だけ記されている (NFJ 61, DD 22.2.1648, 29.4.1648, 26.6.1648)。
- (5) 「chirurgijn」は別に職名で現われる (NFJ 62, DD 9.3.1649, 23.~28.3.1649 等々)。
- (6) NFJ 63, DD 26.1.1650 (Casper Schamburger)° DD 14.11.1650 (cherughijn Casper Schanbergen)° シヤムベルゲルの生涯について以下の論文を参照 (a) W・ミヒェル「出島蘭館医カスバル・シヤムベルゲルの生涯について」『日本医史学雑誌』三六巻三号、二〇一〇-二〇一九〇頁(平成二年)。(b) W・ミヒェル「カスバル・シヤムベルゲルの「弔辞」について」『日本医史学雑誌』三七巻四号、一四三-一五一頁(一九九一年(平成三年))。京都市稲葉神社所蔵の『永代日記』による寛文元年三月四日(外科あるまぬすか)。
- (7) 外科医カツは河口良庵に遡る「阿蘭陀外療集」巻四(慶応大学医学情報センター蔵、494.2/OR-2)の中で見られる。
- (8) NFJ 76, DD 6.11.1662 [m[ee]ste]r Daniel Busch opperchirurgijn)°
- (9) NFJ 76, DD 6.11.1662 (Abraham van Kerpen, onderchirurgijn)
- (10) NFJ 76, DD 6.11.1662 (Abraham van Kerpen, onderchirurgijn)
- (11) NFJ 77, DD 21.10.1663 (Daniel Busch opperchirurgijn, Hermannus Visscher d[ic]o)
- (12) NFJ 77, DD 21.10.1663 (Daniel Busch opperchirurgijn, Hermannus Visscher d[ic]o)
- (13) 一六五五年一月二日「ブッシュは、平戸侯により長崎に勉強のため派遣されていた嵐山甫安に証明書を発行した(平戸観光資料館)° NFJ 78, DD 13.3.1665 (Daniel Busch chirurgijn)
- (14) ヴァン・デル・ヴェステは一六六八年から出島の下級外

- 卒國に於てなり。NFJ 83, DD 13. 2. 1670 (onder chirurgijn Piet[e]r vander Veste)
 (15) NFJ 84, DD 2. 1. 1671 (opper chirurgijn Moises Maroon)
 (16) NFJ 84, DD 14. 7. 71
 (17) NFJ 85, DD 14. 5. 1672 (apotheker Frans Braun)
 (18) NFJ 86, DD 15. 1. 1673 [M]eeste[r] Willem Hoffman en den adisistent Cornelis Lindius)
 (19) 洋学史事典に於る。
 (20) NFJ 87, DD 40. 4. 1674 (opper chirurgijn Willem Hofman)
 (21) NFJ 88, DD 16. 12. 1674, 27. 12. 1674, 19. 3. 1675, 21. 3. 1675, 25. 3. 1675, 30. 3. 1675, 31. 3. 1675 等々 (Wilhelm Ten Rhijne)
 (22) 一六七六年に職を変え、日記には「onderkoopman Willem Hofman」と記されるが、同様に上級外科医の職にも就いてゐた。(NFJ 89, DD 24. 1. 1676)
 (23) NFJ 89, DD 4. 1. 1676, 17. 1. 1676, 24. 1. 1676, 17. 1. 1676, 24. 1. 1676, 22. 4. 1676, 24. 4. 1676, 25. 4. 1676 等々 (Wilhelm Ten Rhijne)
 (24) 洋学史事典に於る。
 (25) 一六八五年一〇月一八日にクローンが原三信にオランダ外科の免状を与えた(現在は福岡市 原家蔵書)。
 (26) NFJ 103, DD 9. 11. 1689 (oppermeester Jan Stokman). NFJ 103, DD 18. 11. 1689 (oppermeester Jan Stokman). NFJ 103, DD 9. 12. 1689 (Jan Stokman opperchirurgijn).

- in). NFJ 103, DD 6. 1. 1690 (oppermeester Jan Stokman) NFJ 103, DD 10. 2. 1690 (oppermeester Jan Stokman) NFJ 103, DD 23. 2. 1690 (opperchirurgijn Jan Stokman)
 (27) ARA, NFJ 102, DD 29. 11. 1690 (opperchirurgijn Engelbert Kempfer), 27. 3. 1691 (oppermeester Kempfer), 15. 6. 1691 (opperchirurgijn Engelbert Kempfer)
 (28) ARA NFJ 103, DD 29. 11. 1691 (medicus Engelb[er]t Kempfer), 2. 3. 1692 (oppermeester Engelbregt kempher), 17. 3. 1692 (doctor Kempfer), 28. 3. 1692 (doctor Kempfer), 21. 4. 1692 (mons[ieu]r Kempfer)
 (29) VOC 1111, fol. 142b (generale missive, Batavia 24. 12. 1634)
 (30) 丸い肉豆蔻は「女性」長さは「男性」と見なされてゐた。
 (31) NFJ 482, p. 440~442 (ナイエンローデからトイギンへの書翰) Hirado 31. 12. 1630)
 (32) NFJ 482, p. 443~444 ナイエンローデからトイギン他への書翰 (Hirado 7. 1. 1631). NFJ 482, p. 444~445 ナイエンローデからヤンポレンへの書翰 (Hirado 7. 1. 1631). NFJ 482, p. 450~455 ナイエンローデから台湾のトミンペンへの書翰 Hirado 15. 3. 1631). モーロミンへ送られた次の写しも参照。VOC 1103, fol. 118 (ヤンヤンからナイエンローデへの書翰) Osaka 16. 1. 1631), fol. 118b (ヤンヤンからナイエンローデへの書翰) Osaka 8. 1. 1631), fol. 119 (ヤンヤンからナイエンローデへの書翰)

- Osaka 19. 1. 1631) fol. 120b (ヤンパンからヤンロー
 子への書翰' Osaka 25. 1. 1631)
- (33) アーレンツのころは金井圃「ケンブリック・マレン
 センとヤン・フォスの五島探検記」『日蘭交渉史』思文
 閣出版' 東京' 昭和六十一年(一九八六年)' 一四五〜一五
 四頁参照。
- (34) VOC 1111, fol. 142b
- (35) VOC 1111, fol. 142b (generale missive, Batavia 24. 12.
 1634)
- (36) 永積洋子『平戸商館の日記』第二輯' 岩波書店' 東京'
 昭和五五年(一九八〇年)' 二一七、四〇〇、一六四、五二六
 頁。
- (37) NfJ 482, fol. 457 (ヤンローからヤンセンの書
 翰' Hirado 23. 3. 1631), NfJ 482, fol. 462 (ヤンロー
 一からヤンパンへの書翰' Hirado 25. 5. 1631)
- (38) NfJ 482, fol. 457 (ヤンローからヤンパンへの書
 翰' Hirado 23. 3. 1631)
- (39) NfJ 482, fol. 459f (ヤンローからヤンパンへの書
 翰' Hirado 25. 4. 1631)
- (40) Blussé, J. L./van Opstall, M. E./T'sao Yung Ho
 (ed.): De Dagregisters van het Kasteel Zeelandia,
 Taiwan 1629-1662. M. Nijhoff, 's-Gravenhage 1986, p.
 406
- (41) Dagregister Batavia, 28. 4. 1637; H. T. Colenbran-
 der: Dagh-Register gehouden uit Casteel Batavia.
 's-Gravenhage 1896ff., Anno 1643-1644, p. 149f.
- (42) NfJ 54, DD 20. 21. 11. 1637
- (43) VOC 1128: 12. 2. 1638, 10. 3. 1638, 7. 5. 1638, 8. 8. 1638,
 9. 9. 1638. VOC 1131: 20. 3. 1639, 12. 4. 1639, 30. 4. 1639,
 8. 5. 1639, 14. 6. 1639, 22. 6. 1639, 28. 6. 1639
- (44) ARA, Collection Sweets, van Vliet, Speex, Mannis,
 No. 7: 16. 12. 1639
- (45) Blussé/van Opstall/T'sao, p. 406
- (46) NfJ 55, DD 21. 7. 1639
- (47) NfJ 5, fol. 50
- (48) NfJ 5, fol. 17b
- (49) NfJ 5, fol. 17b
- (50) NfJ 5, fol. 17b
- (51) NfJ 5, fol. 54b
- (52) NfJ 55, DD 14. 6. 1641, 22. 10. 1641 (Jeuriaen Hense-
 lijn Barbier), NfJ 56, DD 14. 1. 1642 (chirurgijn Ju-
 riaen Hensingh), NfJ 58, DD 23. 9. 1643 (opper chir-
 urgijn m[ees]te[r] Juriaen Hensingh), NfJ 58, DD 1. 9.
 1644 (chirurgijn Juriaen Hensingh), NfJ 58, DD 16.
 9. 1644 (chirurgijn Juriaen Hensingh), NfJ 58, DD
 16. 9. 1644 (chirurgijn Juriaen Hensingh), NfJ 58,
 DD 2. 10. 1644 (chiru[.]gijn Jeuriaen Hensingh),
 H. T. Colenbrander: Dagh-Register gehouden uit Ca-
 steel Batavia, 's-Gravenhage 1896ff., 28. 4. 1637 (Ju-
 riaen Hensingh)
- (53) NfJ 1162, Reekeninge 1643/44 (Jeuriaen Hensingh)
- (54) NfJ 5, fol. 54b (Cornelisz. Stevensz.)

- (52) NfJ 1161, Reekeninge 1642/43 (Stevenß barbier)
- (53) NfJ 5, fol. 19
- (54) NfJ 1162, Reekeninge 1643/44 (Jeuriaen Henselingh)
- (55) NfJ 5, fol. 54b
- (56) NfJ 57, DD 8-10. 1643 (chirurgijn Cornelis Stevensz.)
- (57) NfJ 1163, Reekeninge 1644/45 (Cornelisz Stevens opperchirurgijn)
- (58) ARA 1. 04. 13, Scheepssoldijboeken (船員の賃金帳簿) No. 5278
- (59) ヲハムノの家族にこころしハムノ古史家羅藤所の Dr. Martin 249°
- (60) NfJ 1164, Reekeninge 1645/46 (Carel Kemph van Landauw Barbier)
- (61) NfJ 5, fol. 33 ㄨ ㄨ ㄨ fol. 56b
- (62) NfJ 5, fol. 46 (Johannes Wirts) ㄨ ㄨ ㄨ fol. 60 (Johannes Wunsch)
- (63) Willmann, E. O.: Een kort Beskrifning Ypp Trenne Reesor och Peregrinationer/sampt Konungariket Japan [...] Wiisindborg, Anno MDCLXXIV, p. 194. 一六五二年の海嶺詳口繪に於て被せ「chirurgijn」の字を附せしむ (NfJ 65, DD 11. 2. 1652, 22. 4. 1652, 14. 7. 1652 節)
- (64) NfJ 68, DD 16. 2. 1655 (heelm[eeeste]r Johannes Wunsch)° 洋装中事典に記載せしむるモンテス・ステューテン (Johannes Stiden) にこころの資料は見出し出せなかつた。
- (65) NfJ 5, fol. 88b
- (66) NfJ 66, DD 27. 1. 1653, 4. 2. 1653, 6. 2. 1653 節° NfJ 67, DD 13. 2. 1654 (chirurgijn Jan Stipel). # ㄨ ㄨ ㄨ 27. 2. 1654, 7. 3. 1654, 16. 3. 1654
- (67) NfJ 5, fol. 88b
- (68) NfJ 5, fol. 89
- (69) NfJ 68, DD 4. 4. 1655
- (70) NfJ 31, fol. (Instructie voor de ondercooplyden Cornelisz Mulock, en Roeland de Carpenter, Nagasaki 11. 1. 1660)
- (71) NfJ 5, fol. 95b
- (72) NfJ 31, fol. 155
- (73) Montanus, A.: Denckwirdige Gesantschafften der Ost = Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Nederlanden an unterschiedliche Keyser von Japan. Jacob Meurs, Amsterdam 1671, p. 359
- (74) NfJ 69, DD 15. 2. 1656, 16. 2. 1656, van der Chijs, J. A. (ed.): Dagh-Register gehouden int Casteel Batavia (1624-1682). Batavia 1887-1928. Anno 1656, p. 27, 43, 73, 115, 159
- (75) NfJ 5, fol. 104
- (76) NfJ 31, fol. (Instructie voor de ondercooplyden Cornelisz Mulock, en Roeland de Carpenter, Nagasaki 11. 1. 1660)
- (77) NfJ 72, DD 20. 12. 1658 (onder Coopman ende Dispen-

- cier S[ieu]r Cornelis Mulock)
- (82) NFJ 80, DD 23. 2. 1667 (Arnout Dirks). NFJ 81, DD 5. 4. 1668 (chiru[r]gijn Aernout Dirksen). NFJ 81, DD 9. 4. 1668 (chirurgijn Aernout Dirksen). NFJ 80, DD 24. 27. 1. 1667 (邦臣參校の國臣筆による) Chirurgijn Arnout Dirksen)
- (83) 京師大学七厘圖書館蔵。
- (87) NFJ 82, DD 9. 1. 1669, 10. 1. 1669
- (88) NFJ 83, DD 14. 4. 1670 (m[ee]ste[r] Moijses)
- (89) NFJ 84, DD 2. 1. 1671 (opper chirurgijn Moises Maroon)
- (82) NFJ 83, DD 23. 2. 1670 (apotheker Godfried Haak)
- (88) NFJ 84, DD 15. 1. 1671 (apotheker Goderfried Haeck)
- (88) NFJ 84, DD 14. 7. 71
- (90) NFJ 85, 14. 5. 1672 (Frans Braun). NFJ 86, DD 7. 6. 1673 (23. 4. 2673, apoteecker Brouwn)
- (15) H. T. Colenbrander: Dagb-Register gehouden uit Casteel Batavia. Anno 1674, 11. 12. 1674 (m[ee]ste[r] Adraen van Strijkersberg); バタヴィア日記に対する邦目書き指摘はユートンヒト大学科学史研究所の Elike Weger-Klein による。
- (82) VOC 828, Repertorium op de personalia, Deel 1
Eva Kraft, p. 58° エンゲルヘルム・ケンゲル (Engelbert Kaempfer) もあらずバタヴィアで職を得ようとしたが、ストライケルスベルヒの反対に遭い、日本へ行くことになつた。(British Library, Sloane 3063, fol. 84b: ケン
- ニコラウス・ニコラヤン (Nicolaas Witsen) の参録°)
- (83) NFJ 85, DD 8. 2. 1672 (opper chirurgijn Willem Hofman). NFJ 86, DD 15. 1. 1673 (m[ee]ste[r] Willem Hofman). NFJ 87, DD 30. 4. 1674 (opper chirurgijn Willem Hofman). NFJ 88, DD 27. 11. 1674 (opper chirurgijn Willem Hofman). NFJ 88, DD 25. 3. 1675, 30. 3. 1675 (m[ee]ste[r] Willem Hofman)
- (87) NFJ 87, DD 17. 12. 1673
- (89) NFJ 89, DD 24. 1. 1676 (onderkoopman Willem Hofman die ook met eenen den dienst van opper chirurgijn waarneemt). NFJ 89, DD 24. 1. 1676 参録°)
- (89) NFJ 89, DD 29. 1. 1676
- (89) NFJ 89, DD 4. 1. 1676
- (89) VOC 700, Kopie-resoluties van gouverneur-generaal en raden, 5. 5. 1685
- (86) Eva Kraft: Andreas Cleyer-Tagebuch des Kontors zu Nagasaki auf der Insel Deshima 20. Oktober 1682 -5. November 1683. Bonn 1985, p. 59
- (90) VOC 828, Repertorium op de personalia, Deel 1
- (10) NFJ 97, DD 19. 3. 1684 (Hendrick Obé). NFJ 97, DD 12. 4. 1684, 14. 4. 1684, 15. 4. 1684, 18. 4. 1684, 7. 5. 1684, 10. 6. 1684 (Obé). NFJ 97, DD 6. 8. 1684 (opperchirurgijn Hendrick Obé). NFJ 98, DD 31. 10. 1684 (opper chirurgijn). NFJ 98, 6. 4. 1684, 28. 11. 1684 (opper meester Hendrick Obé, meester Obé). NFJ 98, DD 10. 4. 1684 (oppermeeste[r] Obé). NFJ 98, DD 14. 4. 1684

(opper chirurgijn Hendrick Obé)

(101) NFJ 93, DD 4. 11. 1679 (chirurgijn)

NFJ 94, DD 12. 4. 1681 (chirurgijn Jan Bartelsz)

NFJ 95, DD 5. 4. 1682, 27. 9. 1682 (Jan Bartelsz

Benedictus). NFJ 313, 商館長カンニヤスからの書翰

(Jan Bartelsz)

NFJ 96, DD 26. 3. 1683, 30. 3. 1683, 3. 11. 1683 (m[leeste]

r Jan Benedictus). エヴァ・クラフト 編集の蘭館日誌も参

照° Eva Kraft: Andreas Cleyer-Tagebuch des Kontors

zu Nagasaki auf der Insel Deshima 20. Oktober 1682

~5. November 1683. Bonn 1985

NFJ 96, DD 30. 3. 1683. NFJ 100, DD 4. 12. 1686 (opper

Chirurgijn), NFJ 100, DD 10. 12. 1686, 2. 4. 1687, 8. 6.

1687 (opperchirurgijn Jan Bartelsz.). NFJ 101, DD 11.

11. 1687 (chirurgijn Jan Bartelsz:). NFJ 101, DD 13.

12. 1687 (oppermeester Jan Bartelsz:). NFJ 101, DD

16. 3. 1688 (opperchirurgijn Jan Bartelsz.), NFJ 102,

DD 5. 11. 1689 (opper chirurgijn Jan Bartelsz:). NFJ

102, DD 25. 3. 1689 (chirurgijn Jan Bartelsz:). NFJ

102, DD 6. 5. 1689 (opper chirurgijn Jan Bartelsz)

(103) 岸本裕「本朝和蘭陀外科所謂カスバル流外科の本朝史

料」。日本医事新報、第八〇二号、昭和十三年一月二二日、

三三二~三三三頁。

(104) 桂川甫築の養生室医話、巻の一、五頁 (京都大学富士川

文庫セー1-80c)

(105) 宗田一『日本医療文化史』、思文閣出版、京都平成元年(一

九八九年)、『一二七頁。

(九州大学言語文化部)